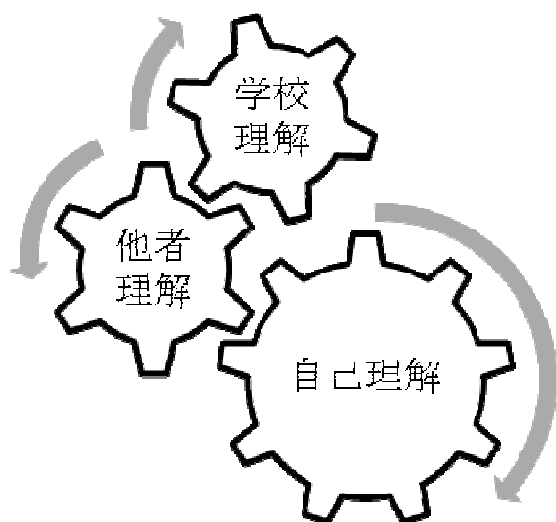


「自己理解を深める体験が 大学生の心理的側面に及ぼす影響」



ラーニングバリュー総合研究所

順天堂大学 准教授 水野 基樹

1. 研究の目的

本研究の目的は「自己理解を深める体験（組織開発）」が大学生にもたらす心理的効果の科学的根拠を示すことである。本研究は組織開発の効果を「自己理解の側面」、「他者理解の側面」、「学校理解の側面」の3側面から捉え（図1）、組織開発を通して大学生にどのような心理的変容が生じているかを明らかにしていく。

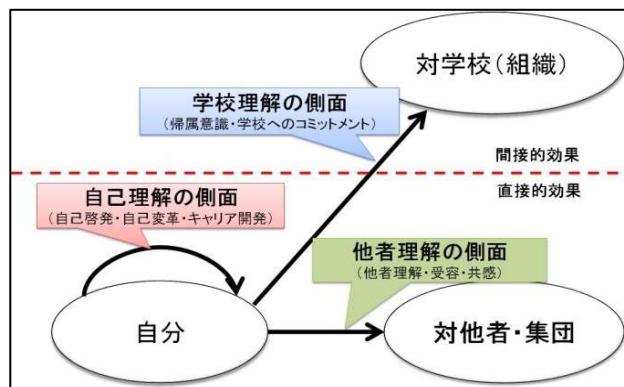


図1 組織開発の介入効果

2. 研究の方法

2.1 対象者

「自己理解の変容」と「学校理解の変容」を明らかにするための調査では、首都圏と地方の大学6校に対して組織開発を行い、参加者の中から無作為に選出した279名に対して質問紙調査を行った。

「他者理解の変容」を明らかにするための調査では、首都圏と地方の大学8校に対して組織開発を行い、参加者の中から無作為に選出した321名に対して質問紙調査を行った。

2.2 質問紙

本研究の質問紙を作成するため、2007年から2008年にかけて予備調査を行った。そこでは、組織開発を体験した大学生140名の内省報告が専門化によって分析され、組織開発の効果に相当する記述が抽出された。それをもとに、「自己理解の変容」を捉えるための30項目（表1）と、「学校理解の変容」を捉えるための20項目（表3）、「他者理解の変容」を捉えるための40項目が作成され、本研究に用いられた。それぞれの項目に対する回答方法としては、「そう思わない（1点）」から「そう思う（5点）」までの5件法を採用した。

2.3 研究の手続き

本研究で用いられる組織開発は、LV社のプログラムに基づくものであり、「自己理解の変容」と「学校理解の変容」の調査には7名の、「他者理解の変容」の調査では9名のファシリテーターが介入を行った。調査はプログラムの終了直後に実施した。

2.4 分析の手続き

得られたデータは統計解析ソフトSPSS15.0による解析が行われた。本資料では因子分析と記述統計による基礎集計結果をまとめるものとする。

3. 結果

3.1 「自己理解の変容」に関する結果

(1) 「自己理解の変容」の構造

「自己理解の変容」を扱う30項目を用いた因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果を表1に示した。この結果は、自己理解の変容は7つの側面から理解することが妥当であることを示している。具体的には、「広い視野の獲得（第1因子）」、「セルフコントロール（第2因子）」、「目標の達成と創造（第3因子）」、「ポジティブシンキング（第4因子）」、「問題解決（第5因子）」、「個性の活用（第6因子）」、「自己受容（第7因子）」という7つの効果が確認されたのである。本研究の対象者においては、とりわけ「広い視野の獲得」や「セルフコントロール」が独立性の高い効果として認められた。

表1 「自己理解の変容」の30項目における因子分析結果

因子名	項目	因子負荷量						
		F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
広い視野の獲得	物事を考える視野が広がりそうだ	0.80	0.17	0.15	0.28	0.05	0.14	0.10
	考え方の幅が広がりそうだ	0.76	0.18	0.18	0.28	0.08	0.10	0.09
	自分を新たな視点で捉えられそうだ	0.63	0.22	0.23	0.18	0.14	0.17	0.09
	自分の可能性に気づけそうだ	0.60	0.09	0.39	0.09	0.22	0.26	0.24
セルフ・コントロール	冷静に自分と向き合えそうだ	0.17	0.70	0.12	0.15	0.14	0.18	0.03
	自分と正面から向き合えそうだ	0.21	0.68	0.09	0.13	0.30	0.32	0.17
	人にまどわされないう物事に取り組めそうだ	0.06	0.54	0.14	0.08	0.03	0.02	0.14
	新しい自分を発見できそうだ	0.40	0.51	0.11	0.09	0.15	0.30	0.05
	自分とうまく接することができそうだ	0.18	0.49	0.19	0.18	0.19	0.15	0.28
	自分のペースで生活できそうだ	0.06	0.36	0.15	0.11	0.05	0.00	0.13
目標の達成と創造	自分の目標が見つかりそうだ	0.19	0.27	0.75	0.14	0.10	0.19	0.09
	うまく目標を立てることができそうだ	0.19	0.21	0.65	0.17	0.17	0.16	0.10
	自分の目標を達成できそうだ	0.10	0.25	0.61	0.28	0.16	0.18	0.11
	将来の自分をイメージできそうだ	0.18	0.03	0.58	0.12	0.13	0.06	0.22
	自分の未来が広がっていきそうだ	0.41	0.22	0.48	0.16	0.23	0.18	0.18
ポジティブ・シンキング	前向きに物事に取り組めそうだ	0.31	0.25	0.12	0.64	0.18	0.16	0.19
	思い切って何かに挑戦できそうだ	0.19	0.09	0.30	0.64	0.20	0.20	0.08
	積極的に行動を起こすことができそうだ	0.20	0.18	0.33	0.63	0.20	0.19	0.19
	状況の良い側面に目が向けられそうだ	0.35	0.39	0.04	0.52	0.16	0.11	0.25
	物事をポジティブに考えられそうだ	0.20	0.29	0.13	0.51	0.23	0.15	0.36
	いろいろなことに興味が持てそうだ	0.23	0.09	0.21	0.50	0.17	0.35	0.02
問題解決	困難に立ち向かえそうだ	0.15	0.21	0.17	0.21	0.83	0.17	0.18
	嫌なことと向かい合えそうだ	0.10	0.17	0.27	0.25	0.64	0.13	0.17
	課題を克服できそうだ	0.18	0.23	0.21	0.33	0.52	0.23	0.12
個性の活用	長所と短所を活かせそうだ	0.17	0.19	0.20	0.26	0.15	0.62	0.08
	短所をなおし長所をのばすことができそうだ	0.21	0.20	0.26	0.27	0.12	0.60	0.17
	自分の持ち味を活かせそうだ	0.27	0.21	0.20	0.20	0.25	0.56	0.25
自己受容	自分を好きになれそうだ	0.12	0.34	0.29	0.16	0.19	0.16	0.76
	自分を大切にできそうだ	0.18	0.37	0.22	0.24	0.16	0.16	0.60
	自分に自信がもてそうだ	0.25	0.23	0.26	0.29	0.29	0.19	0.47
	固有値	3.25	3.12	3.06	3.03	2.24	2.00	1.95
	累積寄与率	10.84	21.23	31.44	41.55	49.02	55.68	62.16
	α 係数	0.89	0.81	0.86	0.89	0.86	0.88	0.82

(2) 本研究の参加者における自己理解の変容

本研究の参加者における「自己理解の変容」の基礎集計結果を示したものが表2である。さらに図2には、同様の結果が棒グラフで示されている。得点は3点以上で5点に近ければ近いほど、より高い「自己理解の変容」の効果が達成されたものとみなすことができる。また、7因子の因子間相関はいずれも有意であった ($r=0.40\sim 0.70, p<0.001$)。以上の結果は、次の3点に集約される。

- ①全ての大学の参加者において、自己理解の変容が認められた。
- ②本研究の参加者の多くは、組織開発の効果として「広い視野の獲得」と「セルフコントロール」、「ポジティブシンキング」をとりわけ実感している。
- ③自己理解の変容に関する全ての効果は相関関係にあり、同時に生起する傾向にある。

表2 組織開発によって生じた自己理解の変容 (6大学)

自己理解の側面	A		B		C		D		E		F		全体(N=279)	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
1.広い視野の獲得	4.29	0.59	3.59	0.99	4.22	0.70	3.71	1.00	4.47	0.47	4.30	0.54	4.18	0.73
2.セルフコントロール	3.79	0.65	3.78	0.77	3.90	0.60	3.63	0.85	4.25	0.46	3.92	0.66	3.87	0.66
3.目標の達成と創造	3.58	0.84	3.27	0.95	3.49	0.72	3.41	0.99	3.78	0.55	3.74	0.57	3.54	0.78
4.ポジティブシンキング	3.91	0.75	3.60	1.05	3.97	0.74	3.68	0.82	4.25	0.47	4.02	0.78	3.93	0.78
5.問題解決	3.55	0.88	3.45	1.01	3.72	0.75	3.43	1.09	3.93	0.52	3.67	0.90	3.64	0.85
6.個性の活用	3.60	0.78	3.31	1.08	3.73	0.79	3.73	0.78	3.85	0.75	3.80	0.71	3.67	0.81
7.自己受容	3.50	0.84	3.23	1.10	3.61	0.88	3.65	1.01	4.06	0.56	3.52	0.93	3.58	0.90

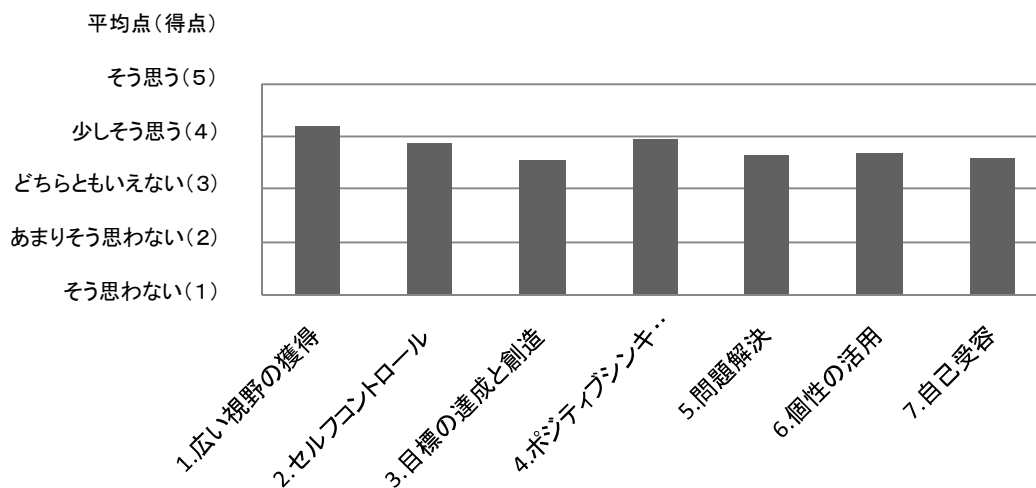


図2 組織開発によって生じた自己理解の変容 (6大学)

3.2 「学校理解の変容」に関する結果

(1) 「学校理解の変容」の構造

「学校理解の変容」を扱う20項目を用いた因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果を表3に示した。この結果は、学校理解の変容は6つの側面から理解することが妥当であることを示している。具体的には、「学校での友人づくり（第1因子）」、「学校行事への参加（第2因子）」、「学校への信頼（第3因子）」、「学業への興味（第4因子）」、「学校生活の充実（第5因子）」、「学校への適応（第6因子）」、という6つの効果が確認されたのである。本研究の対象者においては、とりわけ「学校での友人づくり」や「学校行事への参加」が独立性の高い効果として認められた。

表3 「学校理解の変容」の20項目における因子分析結果

因子名	項目	因子負荷量					
		F1	F2	F3	F4	F5	F6
学校での友人づくり	学校で友達ができそうだ	0.87	0.19	0.13	0.11	0.18	0.18
	学校で仲間と話す機会が増えそうだ	0.77	0.29	0.06	0.18	0.21	0.17
	学校で知り合いがふえそうだ	0.77	0.17	0.13	0.14	0.07	0.15
学校行事への参加	学校で夢中になれる活動が見つかりそうだ	0.24	0.80	0.15	0.19	0.15	0.09
	学校のイベントに積極的になれそうだ	0.23	0.79	0.20	0.11	0.25	0.21
	学校行事に興味を持てそうだ	0.30	0.68	0.22	0.25	0.24	0.17
	学校で何かに取り組むことができそうだ	0.17	0.43	0.26	0.26	0.41	0.11
学校への信頼	学校を頼りに出来そうだ	0.07	0.15	0.83	0.18	0.20	0.17
	学校にいろいろ期待できそうだ	0.12	0.20	0.75	0.23	0.21	0.21
	学校をうまく利用できそうだ	0.18	0.19	0.59	0.28	0.07	0.19
学業への興味	学問に興味を持てそうだ	0.16	0.11	0.23	0.86	0.13	0.04
	好きな授業が見つかりそうだ	0.08	0.20	0.14	0.64	0.10	0.24
	学ぶことの価値がわかりそうだ	0.20	0.17	0.25	0.54	0.20	0.07
学校生活の充実	学校が好きになれそうだ	0.25	0.36	0.35	0.23	0.63	0.24
	学校生活が充実しそうだ	0.38	0.34	0.22	0.16	0.53	0.37
	学校生活が楽しくなりそうだ	0.40	0.34	0.19	0.19	0.53	0.31
	学校に足が向きそうだ	0.14	0.31	0.22	0.27	0.50	0.30
学校への適応	学校の雰囲気になれそうだ	0.30	0.22	0.20	0.19	0.33	0.65
	リラックスした学校生活が送れそうだ	0.20	0.13	0.35	0.12	0.13	0.58
	学校に心地よい居場所ができそうだ	0.38	0.19	0.30	0.17	0.26	0.50
	固有値	2.99	2.85	2.50	2.16	1.99	1.78
	累積寄与率	14.98	29.24	41.77	52.57	62.55	71.49
	α 係数	0.92	0.90	0.87	0.80	0.90	0.83

(2) 本研究の参加者における「学校理解の変容」

本研究の参加者における「学校理解の変容」の基礎集計結果を示したものが表4である。さらに図3には、同様の結果が棒グラフで示されている。得点は3点以上で5点に近ければ近いほど、より高い「学校理解の変容」の効果が達成されたものとみなすことができる。また、6因子の因子間相関はいずれも有意であった ($r=0.30\sim 0.70, p<0.001$)。以上の結果は、次の3点に集約される。

- ①全ての大学の参加者において、学校理解の変容が認められた。
- ②本研究の参加者の多くは、組織開発の効果として「友人づくり」と「学校生活」、「学校適応」をとりわけ実感している。
- ③学校理解の変容に関する全ての効果は相関関係にあり、同時に生起する傾向にある。

表4 組織開発によって生じた学校理解の変容 (6大学)

学校理解の側面	A		B		C		D		E		F		全体(N=279)	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
1.学校での友人づくり	4.48	0.65	4.25	0.77	4.37	0.74	3.92	1.11	4.38	0.74	4.33	0.73	4.35	0.76
2.学校行事への参加	3.70	0.93	3.55	1.15	3.87	0.86	3.41	1.13	3.96	0.57	3.99	0.86	3.79	0.92
3.学校への信頼	3.82	0.81	3.75	0.84	3.61	0.81	3.48	1.12	3.99	0.76	3.82	0.70	3.73	0.83
4.学業への興味	3.83	0.80	3.65	0.80	3.81	0.75	3.27	1.21	4.14	0.58	3.90	0.75	3.80	0.81
5.学校生活の充実	4.16	0.75	3.94	0.78	4.06	0.75	3.70	1.14	4.28	0.55	4.14	0.82	4.08	0.79
6.学校への適応	4.00	0.80	3.81	0.80	3.90	0.70	3.57	1.01	4.16	0.60	4.01	0.79	3.93	0.77

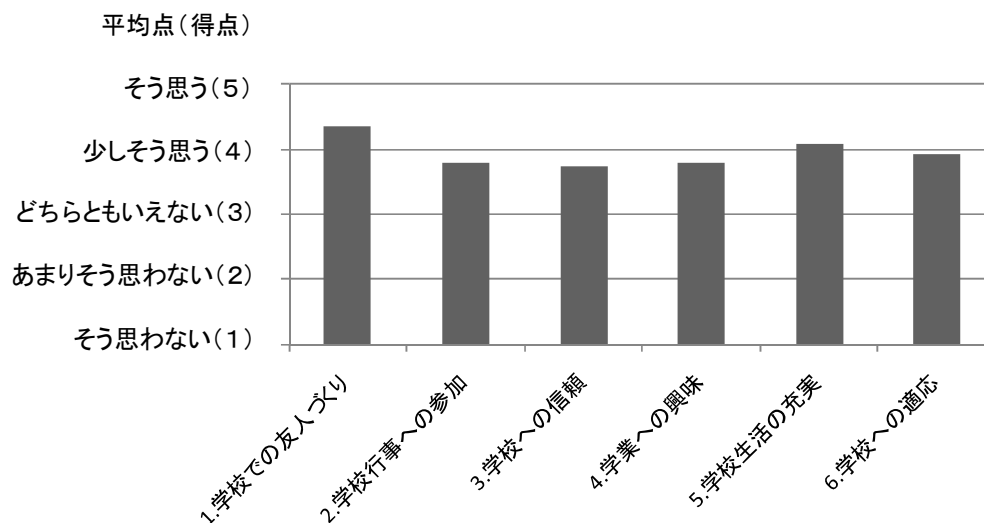


図3 組織開発によって生じた学校理解の変容 (6大学)

3. 3 「他者理解の変容」に関する結果

(1) 「他者理解の変容」の構造

「他者理解の変容」を扱う 40 項目を用いた因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果、他者理解の変容は5つの側面から理解することが妥当であることが明らかとなった（図4）。具体的には、「周囲への貢献（第1因子）」、「他者の尊重（第2因子）」、「他者の受容（第3因子）」、「自己開示（第4因子）」、「他者への信頼（第5因子）」という5つの効果が確認されたのである。

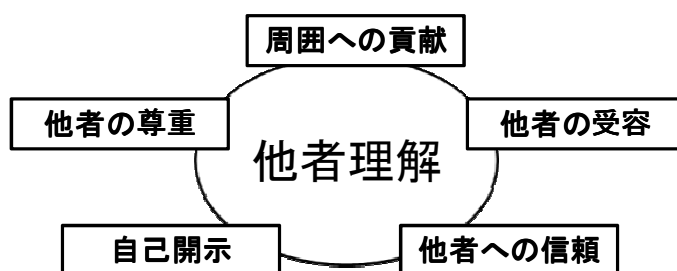


図4 「他者理解の変容」の構造

※「他者理解の変容」に関して、現在もデータの分析を進めている最中である。尚、詳しい研究結果に関しては9月11日・12日の初年次教育学会（高千穂大学）において発表を行う予定である。

4. まとめ

本研究により、組織開発によって大学生の自己理解、他者理解が促されること。そして学校（大学）に対してもポジティブな理解がもたらされることが明らかにされた。また、組織開発による2次的な効果（間接効果）として想定した学校理解の変容が確かめられたことなどは、重要な発見といえる。近年、大学生の自己啓発やキャリア教育を目的として、また大学教育の一環として組織開発が導入されるようになったが、本研究の結果はその効果を裏付けるための基礎資料として十分な成果を提供したといえよう。

<引用・参考文献>

1. French, W. L., & Bell, C.H. (1999). Organization development: Behavioral science interventions for organization improvement. 6th edition. Prentice Hall.
2. Luthans, Fred (1992). Organizational Behavior. 6th edition. McGraw-Hill Book Co-singapore.
3. Yasuyuki HOCHI, Yasuyuki YAMADA, Motoki NIZUNO (2010). Effects of Organizational Development on the Psychological Aspects among University Students. International Conference for the 40th Anniversary of Human Ergology Society Program and Abstracts, pp39-40.
4. 北森義明「組織が活きるチームビルディング」東洋経済新報社、2008年。
5. 北森義明「チームビルディング」『鹿屋体育大学学術紀要第8号』1992年、113-114頁。
6. 産業・組織心理学会編「産業・組織心理学ハンドブック」、丸善株式会社、2009年。
7. 芳地泰幸、山田泰行、水野基樹「組織開発が大学生の心理的側面に及ぼす影響-大学に対する理解の変容に着目して-」、第38回人類動態学会東日本地方会『人類動態学会会報』第91号、2009年、12頁。
8. 水野基樹「新しい生き方を探る9 チームビルディング」『労働の科学』労働科学研究所、第59巻、第7号2004年、42頁。
9. 水野基樹「企業に生かすスポーツ心理学18 絆の強いチームを作るためのチームビルディング」、労働科学研究所『労働の科学』第64巻、第9号2009年、57頁。
10. 山田泰行、水野基樹、芳地泰幸「組織開発の体験は大学生の自己理解の変容をもたらすか?」『産業・組織心理学会第25回大会発表論文集』2009年、91-94頁。